

産業技術総合研究所

第 10120000-B-20250618-001 号

令和 7 年 6 月 19 日

経済産業大臣  
武藤 容治 殿

国立研究開発法人産業技術総合研究所  
監事 中沢 浩志  
監事 菊地 正寛

令和 6 事業年度監査報告の提出について

上記の件について、国立研究開発法人産業技術総合研究所監事監査規程  
第 23 条第 1 項の規定に基づき、別紙のとおり提出いたします。



## 監 査 報 告

独立行政法人通則法（以下「通則法」という。）第 19 条第 4 項及び同法第 38 条第 2 項の規定に基づき、国立研究開発法人産業技術総合研究所（以下「研究所」という。）の令和 6 事業年度（令和 6 年 4 月 1 日～令和 7 年 3 月 31 日）の業務運営、事業報告書、財務諸表（貸借対照表、損益計算書、利益の処分に関する書類（案）、行政コスト計算書、純資産変動計算書、キャッシュ・フロー計算書及びこれらの附属明細書）及び決算報告書並びに連結財務諸表（連結貸借対照表、連結損益計算書、連結純資産変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書及びこれらの連結附属明細書）について監査を実施し、その方法及び結果を取りまとめたので、以下のとおり報告する。

### I 監査の方法及びその内容

この監査報告は、以下のプロセス・方法に基づき、研究所の当該事業年度に係る業務運営、事業報告書並びに財務諸表等（財務諸表、決算報告書及び連結財務諸表をいう。以下同じ。）の監査を行い、作成した。

#### 1. 監査計画の策定と監査準備等

令和 6 事業年度監事監査計画に基づき、理事長、理事、執行役員、領域長、事業組織の所長及び事業所長、監査部門、評価部門等その他職員（以下「役職員等」という。）と意思疎通を図り、情報の収集及び効果的かつ効率的な監査実施に向けた環境の整備に努めた。

研究所の業務運営として重要なコンプライアンス推進、安全管理機能・意識向上、情報セキュリティ対策等、ガバナンスの有効性確保へ向けての推進状況を監事監査上の主たる観点とした。

当該事業年度は、成果活用法人である株式会社 AIST Solutions（以下「AISol」という。）を設立して、研究所のマーケティング機能の多くを同社に移して 2 年目となる。研究所と AISol を一体化した運営（以下「産総研グループ」という。）により経営方針の実現に向けたアクションプラン実行、役職員のエンゲージメント強化、更には価値ベースの研究所運営を継続した。そのため、産総研グループとしてのこれらの計画の進捗状況を注視した。

#### 2. 職務の執行状況等調査

理事会、グループ経営会議/執行会議とその他重要な会議等に参加し、役職員等からその職務の執行状況について報告を受け、理事、執行役員、領域長及び関係部署の管理者、責任者等から職務の執行状況の説明を受けた。また、

AISol の監査役や役職員からも経営状況について定期的にヒアリングを行った。

### 3. 監査の実施と通則法に定める書類及び理事長決裁に係る法人文書の調査

研究所の組織における業務の運営、財産の状況等の監査及び経済産業大臣に提出する書類の調査を実施した。また、理事長決裁に係る全ての法人文書及び規程の新設・改正に係る法人文書を調査した。

### 4. 内部統制システムの整備及び運用状況の調査

役員（監事を除く。以下「役員」という。）の職務の執行が通則法、研究so法又は他の法令に適合することを確保するための体制及びその他研究所の業務の適正を確保するための体制（以下「内部統制システム」という。）について、その整備及び運用の状況を役職員等から報告を受けた。また、個々の運用状況について監査等を行った部署<sup>1</sup>から監査結果の報告を受けた。AISol についても監査役や役職員から内部統制システムの説明を受けた。

### 5. 会計監査人監査の適正性等調査

当該事業年度に係る事業報告書、財務諸表等を検証するに当たって、事前に会計監査人による監査計画と重点監査項目の説明及び期中での経過報告を受け、意見交換を実施した。

期末監査の実施時においては、会計監査人が独立の立場を保持し、かつ、適切な監査を実施しているかを監視及び検討するとともに、会計監査人からその職務の執行状況について報告を受けた。

会計監査人から会社計算規則第 131 条で定める「会計監査人の職務の遂行に関する事項」と同様の事項<sup>2</sup>の通知を受けた。

## II 監査の結果

### 1. 研究所の業務が、法令等に従い適正に実施されているか及び中長期目標の着実な達成に向け効果的かつ効率的に実施されているかについての意見

研究所の業務は、関係諸法令及び研究所業務方法書その他の諸規程等を遵守の上、第 5 期中長期計画及び令和 6 年度計画に従い適正に実施され、また、

<sup>1</sup> 監査室（内部監査）、総務企画部（個人情報保護に関する監査、法人文書点検）、企画本部国際部（安全保障輸出管理監査）、セキュリティ・情報化推進部（情報セキュリティ監査）

<sup>2</sup> 同様の事項は、①独立性に関する事項その他監査に関する法令及び規程の遵守に関する事項、②監査、監査に準ずる業務及びこれらに関する業務の契約の受任及び継続の方針に関する事項、③会計監査人の職務の遂行が適正に行われることを確保するための体制に関するその他の事項をいう。

中長期目標の最終年度に当たり着実な達成に向け効果的かつ効率的に実施されてきたものと認める。

当該事業年度は令和6年度計画を達成し、第5期中長期計画の達成に資したといえる。当該事業年度は研究所の経営計画の実行が強化され、産総研グループとしての経営はスピード感よく進め成果が得られ、AIsoIを含めたグループ経営の立ち上がりは順調であることを認める。特に、今後の産総研グループの急速な成長に不可欠な人的資本の確保に向けて布石を打っていることは特記される。研究者以外の職員の負荷が高い状況はやや懸念されるが、研究所全体としてコントロールされている。

当該事業年度における主な取り組みとして、以下の活動があげられる。

(1) 研究所の総合力を活かした社会課題の解決

①社会課題の解決に貢献する戦略的研究開発の推進

国家戦略に基づいた社会課題をバックキャストすることにより研究テーマを設定し、融合センター・ラボによる領域融合プロジェクトを実施した。エネルギー・環境制約、少子高齢化、国土強靱化、新型コロナウイルス感染症の社会課題に対して、融合等テーマに取り組み、領域融合による総合力化の効果もあり、当該事業年度も成果が得られた。

②戦略的研究マネジメントの推進

社会課題解決指向の所内プロジェクトの研究課題に対して常時モニタリングを行い、解決に向け取り組んだ。

(2) 経済成長・産業競争力の強化に向けた橋渡しの拡充

①産業競争力強化に向けた重点的研究開発の推進

各領域においては、産業競争力強化に資する研究開発を進めた。モビリティエネルギー、電力エネルギー制御、医療システム先端基盤、生物資源利用、人間中心のAI社会実現、サイバーフィジカルシステム、ライフスペース拡大のモビリティ、ナノマテリアル、スマート化学生産、革新材料、情報処理エネルギー効率を向上させるデバイス・回路、データ活用拡大に資する情報通信、変化するニーズに対応する製造、産業利用に資する地圏評価、ものづくり・サービスの高度化を支える計測、バイオ・メディカル・アグリ産業の高度化を支える計測、先端計測・評価などに重点をおいた研究開発を推進して、企業連携を強化した。

## ②冠ラボ・OIL等をハブにした複数研究機関・企業との連携・融合

企業との連携推進組織である冠ラボは成果を伴い着実に増えており、かつ大型化していることから、企業連携の広がりや深化が確認される。コンセプトの段階から企業の新事業シーズを狙う共創型コンサルティングを戦略的に進めた。今後の企業連携を発展させるに当たっては、同業種複数企業との間の利益相反の問題は引き続き課題である。

北陸デジタルものづくりセンターは活動が本格化した。集大成として同拠点での初の冠ラボがスタートすることは画期的な成果である。大学との連携であるOILは全般的に期待された成果を得て、期日が到来している。

## ③地域イノベーションの推進

地域企業との共同研究や試作・評価・コンサルティングのための拠点・設備の整備を行った。それらを活用して、各拠点が独自の運営方針を出して、研究拠点としても特徴ある戦略を打ち出して実行している。また、地域公設試や経済団体との連携を重視した。地域の有力な大学との協働拠点であるブリッジ・イノベーション・ラボラトリ（BIL）は第3号案件まで進んだ。

## ④技術移転ベンチャーの創出・支援の強化

組織取組型スタートアップ支援に取り組むためにAISoIが有望なスタートアップを認定して多面的な支援をしており、成果もみられる。

## ⑤マーケティング力の強化

産総研グループのマーケティング機能を担うAISoIが主導してマーケティングを強化してきており、質・量ともに成長が著しくなっている。目玉の一つである共創型コンサルティングでは顕著な成果を得た。連携テーマ案件を獲得すべく、産総研グループとしてのトップセールスを積極的に進めた。研究所の価値向上を目指して、企業との価値ベースでの連携強化の方針の浸透を図り、大型連携を実現している。

## ⑥戦略的な知財マネジメント

企業との連携を強化して研究所の価値を上げるために知財戦略は重要であり、マーケティング意識を高めて価値を具現化する企画・実行することが求められる。AISoIがその主たる機能を担うために必要な体制を整えてきており、現在は海外展開のための準備に取り組んでいる。

### ⑦広報活動の充実

ブランディング・広報部は、その積極的な広報活動により所内外での存在感が高まってきた。対外的には、斬新な発想と手法を連続的に繰り出し、広報活動の高度化を企画・実行し、従来の研究所広報の枠を超えた成果を上げている。特に、マスコミ露出は経済紙や一般紙、テレビ放映も増えてきており、知名度アップに貢献し、定着した状況にある。理事長懇談会は地域拠点での開催も含めて、内容が一層充実し多様化した。地域拠点と地元メディアとの関係も強化し、地域における認知度向上に努めた。常設展示施設「サイエンス・スクエア つくば」は AIST-Cube（アイストキューブ）に全面改装し、研究所の経営目標と一体化した運営をすることにより、戦略的に重要な施設となった。主たるターゲットは BtoB であるものの、様々なステークホルダーに広く研究所の先進性と社会的価値を訴えて成果を得ている。対内的には、職員へ経営方針を浸透させ、産総研グループ内の連携の重要性について認知を深めることに貢献した。特に、エンゲージメントを高めるために、多様なイベントや施策を続けており、成果も出たことは評価される。

## (3) イノベーション・エコシステムを支える基盤整備

### ①長期的視点も踏まえた技術シーズの創出

基盤的技術の開発を狙って、多種多様なデータを収集できるセンシングシステム、量子状態制御基礎技術、バイオものづくりを支える製造技術、先進バイオ高度分析、データ連携基盤のような長期的・挑戦的な研究開発について引き続き積極的に取り組んだ。

### ②標準化活動の強化

政府も標準化強化を打ち出す等、環境が改善されている中で、領域横断的に標準化活動全般の強化に取り組み、標準化の重要性の浸透に努め、着実に国際標準化活動の成果が得られている。なお、一層の推進のためには、思い切った施策により、研究者の意識改革と評価制度の見直しが望まれる。

### ③知的基盤整備と活用促進への取り組み

国の「知的基盤整備計画」に沿って、地質調査や計量標準に関する知的基盤整備、活用促進に取り組んだ。個別テーマとしては、ナショナルセンターとしての地質情報整備、地質情報管理と社会への活用促進、計量標

準の開発・整備・供給と活用促進、計測技術を活用した適合性評価基盤の構築がある。社会的に不可欠な役割を担うが、社会実装を意識した取り組みの一層の強化を期待する。

#### (4) 研究開発成果を最大化する中核的・先駆的な研究所運営

##### ①特定法人としての役割

特定研究開発法人として「第5期産総研の経営方針」の達成を目指して、様々な取り組みをスピード感よく打ち出し、研究開発成果を最大化するための研究所マネジメントに取り組んでいる。AISoI 設立によりマーケティング力を強化し、AI 戦略 2022 やゼロエミッション政策において中心的役割を担っている。

##### ②産総研からの出資による外部法人を活用した外部連携機能の強化と民間資金獲得の推進

AISoI との連携体制を強化し、提供価値をベースとした企業等との連携強化、研究開発成果の創出、社会実装への橋渡しを推進し、民間資金獲得の拡大を図り、成果が得られた。

##### ③外部との研究活動に従事する研究者グループ及び個々に対するインセンティブの付与

民間資金獲得は今後の研究所の成長に不可欠であり、その一部を原資として、獲得に貢献した職員にインセンティブを配賦する制度（令和5年度に整備）を充実させている。企業との連携推進に繋げており、有用な制度と考えるが、今後の検証も必要である。

##### ④オープンイノベーションのプラットフォームとしての機能強化

地域イノベーションのための北陸デジタルものづくりセンターの運営、SCR を活用した先端半導体の前工程技術開発プロジェクト推進、産業競争力強化法に基づく事業者への研究施設の利用拡大対応を着実に遂行している。

##### ⑤技術経営力の強化に資する人材の育成

イノベーションスクール及びアントレプレナーシップ研修は当該事業年度も一層拡充し、順調に運営されている。デザインスクールは成長戦略も含めた今後の方針に注目する。

#### ⑥イノベーションの創出に必要な研究力の強化

首席研究員活用強化と制度改革、若手融合チャレンジ研究、国際化ボトムアップ連携推進、研究者が研究活動に専念できる環境整備のための業務効率化等に取り組んだ。また、経済安全保障も踏まえた上で、国内外の有力研究者の採用に努めている。

#### ⑦技術インテリジェンスの強化・蓄積と国家戦略等への貢献

最先端の技術動向把握・技術分析と研究所の研究レベル把握による研究戦略策定・実行を目指しており、調査分析を取り纏めたエマージングテクノロジー報告書の充実と活用に努めた。積極的に経済産業省と技術インテリジェンスについて情報交換した。

#### ⑧国の研究開発プロジェクトの推進

グリーンイノベーション基金事業、2050年カーボンニュートラルに伴うグリーン成長戦略、革新的ロボット研究開発基盤構築事業、次世代コンピューティング拠点整備、マテリアル・プロセスイノベーションプラットフォーム拠点整備、量子・AI融合技術ビジネス開発グローバル拠点整備、バイオものづくり拠点整備等、国家戦略を実現するための国の研究開発プロジェクト組成に貢献するとともに、プロジェクトを牽引する役割を果たしている。

#### ⑨国際的な共同研究開発の推進

ゼロエミッション国際共同研究センターを主体として、国際会議「RD20 (Research and Development 20 for clean energy technologies)」の第6回目をインドで開催（ハイブリッド開催）し、会議を成功裏に終了している。

### (5) ガバナンスの有効性確保

#### ①コンプライアンスの推進

研究所ガバナンスに関わるコンプライアンス事案は発生していない。

全般的なリスク事案については、毎週開催されるコンプライアンス推進委員会に報告され、対応策を協議、実行している。

内部監査結果については、監査対象部署への改善指示・指導とともに制度所管部署等への情報共有と必要な提言等を行っている。

## ②安全管理機能・意識の向上

安全管理については、現場の自己責任による安全管理が定着してきている。当該事業年度において、安全意識に緩みはみられない。今後とも重篤な労働災害を防止するためのルールを厳守させるとともに、安全意識の維持向上に尽力してほしい。

## ③情報セキュリティ対策

各研究ユニット、本部組織及び事業組織に対する情報セキュリティ監査結果については概ね問題ないことが確認された。AIST ネットワークはほぼ問題なく運営されており、今後ゼロトラストを導入して安全性をさらに強化する予定である。各研究ユニットが独自に管理するサーバー等 AIST ネットワーク外で運営されるシステムの管理は各研究ユニットに任されてきたが、現在研究戦略企画部が改善に向けた施策に取り組んでいることは評価できる。

セキュリティインシデントは重大インシデントがなく全般的に抑制されているが、撲滅可能な禁止ソフトウェアの利用等が引き続き発生しており、情報漏洩はじめ重大なリスク事象に繋がりがねないため、研究所全体の意識を一層高める必要がある。

大規模な情報セキュリティインシデント発生時に対応するための訓練を引き続き実施し、復旧体制や手順の確認を実施するとともに、パンデミックにおけるシステム運用担当者や運営支援事業者の不足・リモートに応じた対策もできている。

## (6) 人材育成、ダイバーシティ推進

### ①人材の拡充・育成

「産総研人材マネジメントポリシー」に基づき、各人材のキャリアパス構築に向けた採用・育成・配置・評価等を引き続き行っている。修士卒研究者の採用強化策やエンジニアリング人材採用等により研究リソース確保のための強力な施策を打ち出すことに加えて、職員の待遇向上と福利厚生の実施を目的とした策に引き続き取り組んでいる。

定年延長が始まっており、特にシニア研究職員の活性化による研究所のパフォーマンス向上に一層尽力されたい。

### ②ダイバーシティの推進

多様な人材確保、環境の整備という観点から、ワーク・ライフ・バランスの実現、育児・介護支援の強化、女性職員の活躍推進、外国人研究

者の採用・受入・活躍支援、キャリア形成を核にダイバーシティ推進策を一層進めている。新たな目標数値も導入されて、取組みが強化された。

新規採用研究職員における女性研究者の累積比率（第5期中長期計画の期間）は18%以上維持とする目標において、当該事業年度の採用比率は28.7%となり、修士卒採用強化は女性研究者の採用比率改善にも有効であったと考える。

#### （7）研究施設の整備と効率的な運用

施設整備計画に基づいて、限られた予算の中でメリハリをつけて、施設・設備の改修を進めた。

#### （8）業務の効率化

業務の拡大・多様化に応じて、業務関連の人員不足感は強い。それに対して、アクションプラン内の業務関連の各項目を進めて対応してきた。これらはトップダウンの施策によるものと、現場の業務見直しによる業務削減というボトムアップによるものとの両面がある。両者によるプラスの相互作用によって効果を着実に出している。

業務システム更新においては、一部に遅れが出ているものの概ねスケジュールに沿った開発が進んでいる。

研究所全体として運営費交付金に係る経費の効率化目標（前事業年度比1.36%以上の効率化）を達成している。

### 2. 内部統制システムの整備及び運用についての意見

当該事業年度の業務運営における内部統制システムの整備及び運用は適正に実施されているものと認める。

また、内部統制システムに関する理事長の職務の執行について、指摘すべき重大な事項は認められない。

### 3. 研究所の役員の職務の遂行に関し、不正の行為又は法令等に違反する重大な事実があったときは、その事実

役員の職務の執行に関する不正の行為又は法令等に違反する重大な事実は認められない。

### 4. 財務諸表等についての意見

（1）財務諸表等（利益の処分に関する書類（案）を除く。）は、独立行政法人会計基準及び一般に公正妥当と認められる会計基準に準拠して作成されて

おり、研究所の財政状態、運営状況、キャッシュ・フローの状況を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

(2) 利益の処分に関する書類(案)は、法令に適合しているものと認める。

(3) 決算報告書は、予算区分に従って、一定の事業等のまとまりごとに決算の状況を正しく示しているものと認める。

(4) 会計監査人は、財務諸表等(利益の処分に関する書類(案)を除く。)が、我が国において一般に公正妥当と認められる独立行政法人の会計の基準に準拠して、研究所の財政状態、運営状況、キャッシュ・フローの状況を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める旨の「無限定適正意見<sup>3</sup>」を付している。会計監査人は、利益の処分に関する書類(案)は、法令に適合しているもの、事業報告書(第20期事業年度以降の各事業年度の会計に関する部分に限る。)は、研究所の財政状態、運営状況及びキャッシュ・フローの状況を正しく示しているもの、決算報告書は、予算区分に従って、一定の事業等のまとまりごとに決算の状況を正しく示しているものと認めている。

会計監査人である有限責任あずさ監査法人の監査については、監査の方法及びその内容、会計監査の結果報告は相当であると認める。

#### 5. 事業報告書についての意見

令和6年度事業報告書は、法令に従い研究所の業務の状況を正しく示しているものと認める。

#### 6. 監査のため必要な調査ができなかったときは、その旨及びその理由

該当事項なし。

### Ⅲ 独立行政法人改革等に関する基本的な方針等過去の閣議決定において定められた監査事項についての意見

#### 1. 総論

閣議決定等に基づき独立行政法人を対象とした政府及び行政改革実行本部等からの要請(給与水準の適正化、研究所の長の報酬水準、契約の適正化、保

<sup>3</sup> 無限定適正意見とは、財務諸表監査等の監査人による監査において表明される意見の一つで、一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って監査を実施した結果として、監査対象となった財務諸表等について虚偽記載等が発見されず、記載内容が妥当であるという相当の心証を得た場合に表明される監査意見をいう。

有資産の見直し、情報開示及び公益法人等への会費等支出など)に係る措置については、それぞれ適切に対応されているものと認める。

## 2. 個別事項

### (1) 給与水準の適正化

研究所の役員の報酬等については、その役員の業績が考慮されなければならないとする通則法第 50 条の 2 の趣旨を踏まえ、理事長の業績反映額は、経済産業大臣の業績評価により、また、その他の役員にあつては経済産業大臣の項目別の業績評価及び業務に対する貢献度を総合的に勘案し決定されており、その報酬水準は妥当であると認める。

また、職員の給与等についても、その職員の勤務成績が考慮されなければならないとする通則法第 50 条の 10 の趣旨を踏まえ、人事院の給与勧告等を考慮して決定するとともに、毎事業年度行う目標設定管理型短期評価による業績評価等を踏まえ決定されており、その給与水準は妥当であると認める。職員の給与水準の適正化に係る具体的な改善策と数値目標を内容とする取り組みについては、着実に実施されてきたことにより、当該事業年度においては、①事務・技術職員は対国家公務員指数 99.4 (前事業年度 100.4)、②研究職員は対国家公務員指数 104.1 (前事業年度 103.2) となっている。

### (2) 理事長の報酬水準

理事長は、研究所の高度で多様な業務を総理し、世界最高水準の研究とその成果の橋渡しをするために、幅広い知識と経験による高いマネジメント能力とリーダーシップを発揮し、牽引することが求められる。

理事長の報酬は、独立行政法人整理合理化計画(平成 19 年 12 月 24 日閣議決定)による要請を継続して踏襲し、国家公務員指定職俸給表の事務次官の給与の範囲内としていることから、報酬水準は妥当であると認める。

### (3) 契約の適正化(随意契約の適正化を含めた入札・契約の状況)

研究所に設置している契約監視委員会(令和 6 年 12 月 20 日及び令和 7 年 6 月 17 日開催)において、研究所全体の随意契約の妥当性及び一般競争入札等の契約の点検及び令和 6 年度調達等合理化計画の実施状況の点検、令和 7 年度同合理化計画策定の点検並びに特定国立研究開発法人特例随意契約の実施について審議するとともに、必要な情報の提供を求めてきた。

研究所は、ガバナンスの更なる強化に努めており公平性、透明性、競争性の確保の向上への取り組み、適正な検収、不祥事発生 of 未然防止・再発防止のための取り組みなど、適切な随意契約や一者応札・応募の低減に向けた取

り組みを継続している。

(4) 保有資産の見直しについて

土地、建物等の保有の必要性について、当該事業年度においても見直しを実施し、毎年度策定している施設整備計画（令和6年度改訂版）へ反映していることを認める。

(5) 研究所の情報開示等について

研究所の情報開示については、国民の情報へのアクセスを容易にするため研究所のウェブサイト、①附帯決議等をふまえた総務省通知に基づく情報公開の項目の他、②独立行政法人等の保有する情報の公開に関する法律に基づく公表事項、③独立行政法人通則法に基づく公表事項、④法令、ガイドライン、その他による公表事項に区分し、適時適切に開示していることを認める。

(6) 公益法人等への会費の支出について

行政改革実行本部において決定された「独立行政法人が支出する会費の見直し」において規定されている、見直しの基本原則及び会費の見直し・点検の趣旨を踏まえ、公益法人等に対する会費の支出の是非を判断しており、また、会費（年10万円未満のものを除く。）を支出した場合は、四半期ごとに支出先、名目・趣旨、金額等の事項を研究所のウェブサイトにおいて公表していることを認める。

#### IV その他

##### 1. 産総研グループの成長戦略とガバナンス体制について

産総研グループは、多様かつ難解な社会課題の解決を目指し、長期的戦略に基づいて急速な成長を遂げる中で、参入障壁の高い画期的なビジネスモデルの構築を志向している。その中で、マーケティング機能を担っているAISoIは、研究所にない経営の自由度を活かして、成果の社会実装を通じた研究所の価値向上を図っている。これは国立研究開発法人として初の本格的な試みであり、グループ全体として攻めと守りの両面から戦略的な発展が期待される。

こうした取り組みを着実に推進するためには、人的資本をはじめとするリソースの確保が最大の課題となる。その確保への尽力の成功を期待するとともに、状況に応じた適切なグループガバナンスを実施し、長期的視点に立った経営形態等の議論を深めていただきたい。

## 2. 災害時の研究所の業務運営体制 (BCP) について

BCP については産総研グループとして統合されたプランの策定作業が続けられている。現段階では、基本的な枠組みができた段階にあるが、今後の実用に十分耐えられるよう整備すべき事項も多く残っている。今後、実効性のあるプラン策定を目指してほしい。

## V 監査報告を作成した日

令和7年6月17日

国立研究開発法人産業技術総合研究所

監事 中沢 浩志

監事 菊地 正寛